

説教余滴、2018年2月18日、ラス・カサス

前回は、特権階級の一人としてのラス・カサスの姿でした。彼は成長します。

1511年12月、ラス・カサスの運命を変えた最初の出来事が起こります。サント・ドミンゴで生活していたドミニコ会員アントニオ・デ・モンテシーノスが、スペイン人のインディオに対する不当な扱いを初めて非難しました。この運動はやがてスペイン王室も動かし、フェルナンド2世のもとにインディアス政策を検討するブルゴス会議が開かれ、ブルゴス法を制定します。

1512年、ディエゴ・コロンはキューバ島征服軍を出動させ、ディエゴの友人であったラス・カサスも従軍司祭としてこれに加わりました。軍勢の中には、後にコンキスタドールとして知られたエルナン・コルテスもいます。この軍事行動の中でおこなわれたインディアンに対する拷問と虐殺を目の当たりにしたラス・カサスは、激しい良心の呵責を感じるようになりました。1514年には従軍司祭の地位を捨て、農業に専念しながら聖書について観想する生活に入ります。聖書のメッセージと現実に行っているインディオの不当な扱いは、明らかに相容れないものでした。司祭としてラス・カサスの苦悩は頂点に達していました。

1514年8月15日、ラス・カサスの人生における「第一の改心」と呼ばれる出来事が起こります。ラス・カサスは熟考の末、所有していたインディオ奴隷を解放し、自らのエンコミエンダを放棄。サンクティ・スピリトゥスで行った聖母被昇天祭のミサの中でエンコミエンダ制の矛盾を厳しく糾弾しました。

エンコミエンダ制とは、アメリカ新大陸に入植した植民者に対し、インディオに対するキリスト教の教化と保護を条件に、その統治を委任(エンコメンダール)すること。インディオの労働は実質的な無給の強制労働に等しかった。なお、東南アジア・フィリピン植民地でも同様の形態の植民地経営が行われた。